



第32回

ピアノデュオ ドゥオール

藤井隆史 先生 白水芳枝 先生

■ピアノデュオ ドゥオール

2004年にドイツで結成。国内外で500を超える演奏活動を行い、アルバムも6枚リリース。どれも高い評価を受けている。

藤井隆史

Takashi Fujii ◎東京藝術大学付属高校、同大学、同大学院修了。植田克己、クラウス・シルデの両氏に師事。武蔵野音楽大学講師。

白水芳枝

Yoshie Shiramizu ◎兵庫県立西宮高校音楽科、東京藝術大学卒業。笠間春子、井内澄子の両氏に師事。国立音楽大学講師。

公式サイト: www.yoshie-takashi.com

◆ピアノデュオ ドゥオール デュオセミナー

8月31日(水)～9月3日(土)

ピアノデュオを浴びる。ピアノデュオを感じる。

創造の4日間 in 彩の国さいたま芸術劇場

音源審査提出締切: 6月30日(木)

デュオセミナー専用 URL

<http://www.yoshie-takashi.com/seminar.html>



今回の「レッスン密着レポ」には、人気&実力を誇るピアノデュオ「ドゥオール」の藤井隆史先生と白水芳枝先生が登場！訪れたのはお二人のご自宅に併設されたレッスンスタジオです。さすがスーパーデュオ！グランドピアノが2台入ったお部屋が2つありました。この日はスタインウェイ2台を使っのレッスンです。両先生のもとで研鑽を積み、デュオを結成して2年ほどだというピアニストのお二人が、連弾の極意を学びました。

本日のレッスン曲

ブラームス
ハンガリー舞曲集

第1番 ト短調
第5番 嬰へ短調



〈ご協力いただいた生徒さん〉

ピアノデュオ ダリア
本間翔子さん〈左〉
森重まりなさん〈右〉

注目ポイント

1

耳で音楽の流れを、 目で打鍵の瞬間を捉える

レッスンはこれまで本間さんと森重さんが練習を重ねて来た「ハンガリー舞曲」第5番から開始。息を合わせて弾き始めた2人だが、少し力

んだような響きでスタートした。

「今、2人とも息を吸ってから入りましたが、同時に手を少し上げて、落とす、という動作で弾き始めましたね。そうするとコツンとキツイ音が出てしまいます。弾き始める前から音楽はすでに流れていたかのように、その流れを感じて息だけを合わせ、手は上げずに入りましょう」（白水先生、以下S）。

「4小節目までワンフレーズですけれど、音楽の方向性を考えてみると、フレーズの山場は？ そう、3小節目ですね。ここはⅣの和音で、セコンドにシンコペーションのリズムがある。セコンドの右手は小さく弾かなければいけませんが、リズム変化はきちんと意識して（譜例1）。9小節目からプリモはユニゾンとなり、音域の立体感が作られます（譜例



木目の壁が美しい落ち着いた雰囲気スタジオで、集中度の高いレッスンがスタート！

譜例1 第5番 第1～4小節



譜例2 同 第9～12小節 プリモ



譜例3 同 第15、16小節



2)。ユニゾンでは左右の音量バランスを均一に保ちましょう。ところどころで変わってしまうと、メロディーラインに高低のバラつきが感じられてしまいます。13小節目からは、プリモ右手の〈レード♯-シーラ〉という下行形と、セコンド左手の〈ファ♯-ミーレード♯〉という下行形の作り出すハーモニーを感じてください。

16小節目の *sf* は、セコンドは小指、つまり低い方の音に付けるつもりで(譜例3)。連弾では、とにかく音域をフルに使う意識を持ってください(藤井先生、以下F)。

「17小節目からは繰り返しますが、今、出だしで微妙にズレてしまいました。デュオを長く続けていると2人がだんだん似てきますが、ズレをより減らすためには、相手の特徴を

知っておくことも大切。お互いの性格や傾向を、どんなふうに捉えていますか？」(S)

この問いかけに、森重さんは本間さんをおおらかな性格、本間さんは森重さんを細やかな性格と感じていると答えた。そこから本間さんが「相手の様子を見過ぎることで遅れがちになる」と分析した。

「合わせるときは、耳だけでなく目でも確認します。相手の指が鍵盤の底に落ちる瞬間をよく見ること。そのためには早く暗譜することが大事ですね」(F)

注目ポイント

2

和声の動きを意識して、
繊細なバランス調整を

続いては、練習を始めて日が浅いという「ハンガリー舞曲」第1番。セコンドの独奏から開始し、プリモが下行する装飾的な音型を添える。「セコンドはうら寂れた雰囲気で、お客さんを引き込みましょう。5小節

譜例4 第1番 第3～6小節



「音の受け渡し」箇所を実演しながら指導するお二人。

目(譜例4)の右手和音はフレーズの落ち着くところですが、同時にプリモに音を受け渡し気持ちで」(F)「プリモが突然入った感じにならないように、セコンドが渡してくれた和音をよく聴いて、あくまでもその和音の中で響かせる程度の音量バランスを心がけるといいですね」(S)「48小節までは、この同じ音型のフレーズで構成されていますが、17～18小節、および41～42小節の和声はg mollのV度〈レーファ♯-ラ〉。長3和音の持つ生命力や前へ進もうとする方向性をもっと意識して。ただ『合わせて弾いています』といった感じにならないように、ハーモニーの流れの中にいる感覚を大事にしながら音楽作りをしてください」(F)「49小節目からのプリモの音型は、

譜例5 第1番 第49～52小節



譜例6 同 第73～76小節



デュオではお互いの性格なども考慮しつつ、広い音域を駆使した音楽の「方向性」を共有することが大切。

装飾的に自由に弾いていいと思います(譜例5)。セコンドは、しっかりプリモを見て合わせてくださいね」(S)

「連弾では2人同時にパッと手が上がると、とても気持ちがいいのですが、それで満足せず、余韻の残る響きがきちんと作れているかを耳で判断すること。

73小節目からは、セコンドの右手がピアノの音域的にとっても音が鳴りやすいので、ボリュームが出過ぎない

譜例7 同 第81～84小節



譜例8
同 第166,167小節



れます。でも単なる繰り返しではなく、プリモが主旋律を担当するところに、冒頭との違いがありますね。そして今度は、プリモがセコンドに主旋律を受け渡します(96～97小節)。さらにセコンドの和音を受け取って、装飾的な音型を入れる。このように音を受け渡したりもらったりと、ひとつの作品を共有しながら音楽を作り上げていくのがデュオの醍醐味ですから、こういうところは大切に弾いてください」(S)

「前半の57小節目と後半の149小節目、および161小節目を比較すると、セコンドが前半ではプリモに反行して上行していますが、後半はプリモと一緒に下行します。暗譜のポイントにもなりますので非常に大切です。

166～167小節、終結部の和音は、プリモは両手の上の音〈ソーファ#ーソ〉がメロディーなのでよく聞こえるように(譜例8)。セコンドの右手は極力抑えて、左手の小指の最低音を響かせましょう。ソロでは使用しない幅広い音域を使えるデュオでは、プリモの右手小指、セコンドの左手小指の音が大切です。167小節のおしまいの和音は、両者の手もペダルも、全部一緒のタイミングで上げましょう」(F)

ようにバランスに注意します(譜例6)。ただし、75小節目は、プリモの73小節目の音型を模倣しているので、ここは大事に響かせてください」(F)

注目ポイント

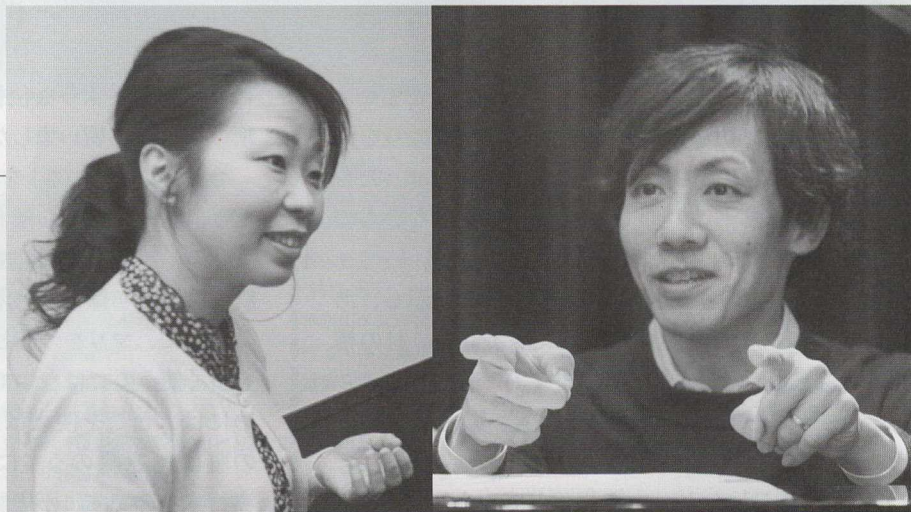
3

和声の動きを意識して、
繊細なバランス調整を

「81小節目からは、プリモが下行する動きなのに対し、セコンドのバスは上行する動き、つまり両者が反行していますよね(譜例7)。85小節目も同じ。さらに81小節目はB durの属七の和音、85小節目はIVの和音という、和声的な響きの違いも捉えれば、単純にpかfかという強弱変化の違い以上の表情が付けられると思います」(F)

「93小節目から冒頭の音楽が再現さ

先生に Interview



——今日は「目を使って合わせる」など、デュオならではのレッスン・ポイントがありましたね。

白水 「合わせる」というのは、実は非常に難しいことです。私たちはデュオを組んで12年になりますが、最初は本当に苦労しました。メトロノームを使っても、サンハイ!と掛け声をかけてみても、1拍目がズレてしまう。それは、2人の指が鍵盤に落ちるスピードが違うからだったのです。脈動も体型も違う人間同士ですから、それはある意味自然なこと。ですから、お互いの指が落ちる瞬間をしっかりと見て合わせていく必要がありますね。

藤井 身体の使い方も、ソロとはまったく違ってきます。連弾で悩ましいのは、2人の肘がぶつかり合ってしまうこと。互いの身体を外側へと移動させるだけでなく、前後にもずらすなどの工夫が必要です。そうしな

がら、2人で1つの拍感を作っていく。僕らはスコアを読み込む譜読みの段階から、「合わせ」をやっていきます。

白水 私たちは、聴いているお客さまにとって自然で音楽的に聞こえる弾き方を追求していますから、「そこはセコンドの右手で取った方が弾きやすい」「ここはプリモが伴奏を弾いたほうが自然」など、パートの割り振りをスコアに書かれたものと変えることがあります。作曲家は1人で2人分を弾けたわけもなく、あくまで想像しながら記譜したのでしょうから、私たちも作曲家の求めた音楽のあり方を想像して工夫するのがいいと考えています。

藤井 昨今はデュオのレベルがとても高くなりましたね。セミナーなどでは「合う／合わない」といった基本的な質問ももちろん受けますが、より音楽的に踏み込んだ内容についてお話しさせていただく機会も増え

ています。今日のレッスンでも和声や音型を活かした音楽作りの話になりましたが、それらはソロにもデュオにも当てはまる大切なことです。

——生徒に連弾をさせる場合、子どもの性格によってプリモかセコンドかを指導者が決めることもあると思いますが、どんなことに留意したらよいのでしょうか。

白水 ハーモニーのベースを担うセコンドがベダルを踏みますので、繊細な踏み替えが得意な生徒さんをセコンドにするのは一案だと思います。

藤井 連弾を通じて、生徒の意外な性格がわかることもあります。目立ちたがり屋の子でも、実は下支えをするのが大好きでセコンドが向いているかもしれません。子どもの性格については先生の思い込みがあるかもしれませんが、余裕があれば両方弾かせてみることをお勧めします。